連載（企業経営・戦略）：社会を耕す⑥

社会風土としての少子化圧力

日本マネジメント総合研究所(同)　理事長
経営管理学修士（MBA）戸村　智憲

1. はじめに

さて、前回までに社会貢献についてのお話しをまとめてみたが、今回は、筆者自身がダイバーシティ経営やワークライフバランスも指導する頂く身として、自ら育児・家事・仕事・社会貢献活動などを実践する中で、肌身で感じてきた社会風土として少子化を「強化」してしまう土壌の課題について見つめてみようと思う。

少子化対策・男女共同参画などについては、社会保障制度の関連もあり安倍政権でも注力している（ように思える）課題であるが、なかなか、社会一般において課題解決や少子化対策の必要性や育児をはじめ、子供という存在を社会が尊重し大切にするという姿勢に転じていないことを筆者は憂慮せざるを得ないのである。

2. 少子化に憂う社会の陰で子供につらくあたる社会的土壌と論争

読者諸氏において経験があるのかもしれないが、空の旅において、子供が泣く声にいらだちクレームをつけ、子連れ旅行者をにらみつけるような空の旅人が少なくないのが日本社会であるような感があるのは筆者だけであろうか。

また、日本人同士の様々な「機上での子供論争」において、子供を連れて空の旅に出るのは、親が勝手に子供を連れて行くから悪であるとか、高校生や成年同士でも欧米ではまくら投げやバカ騒ぎまで起こるエコノミークラスという、低料金の代償にビジネスクラスやファーストクラスに比べて様々な不都合を甘受することを社会的にも航空料金の売買としても契約している座席ですら、日本人の論議として静粛に整然としていなければ悪であるという議論が飛び交ったりする。

図1

確かに、子を持つ親としての筆者が見ても、泣く子や気ままに騒ぐ子をほったらかしにしていたり、周りが子連れに無条件に優先して当然だといわんばかりの振る舞いをしたりする親には、非常に残念な思いがする。

しかし、泣く我が子を周りに気遣ってあやしたり、騒ぐ我が子に公共の場でのマナーやルールを諭していたりするような、親としての義務を多少なりとも果たそうと努力している子連れ旅行者に対して、果たして、法的にも倫理的にも、また、日本

1343-5566/14/¥500/論文/JCOPY

社会が抱える少子化の問題の社会的な解決においても、子連れ旅行者が生じさせた「受忍の範囲」におけることを悪とし遠ざけクレームを猛然とつけてくることは、果たして社会的に健全なものであろうかと筆者は疑問に思う。

3. 日本人旅行者が大半の日系航空会社の国際線機内にて…

実際、筆者が多くの方々のご支援・ご助力を賜りながらコツコツと働き節約して旅行資金を貯めつつ、日常の支払いを某航空会社のマイレージ機能付きクレジットカードで支払い、これまたコツコツと貯めたマイルを使って、8ヵ月になる我が息子を伴って、3年弱ほど住んでいた思い出とゆかりのあるハワイに連れて子連れ旅行に行ってきた。

365日・24時間体制で育児も家事も仕事もこなしつつ、年に1度くらいは、筆者の家族でまとまってゆっくり語らい楽しい場をもつために、また、息子に早くからいろんな体験や環境下での経験をしてもらおうと、抱っこやおむつ替えのサポートや旅行中の周囲にいろいろと配慮しながら、筆者はエコノミークラスで子連れ旅行に出かけたのであった（年始ごろの旅行中も、日本ではビジネスが動いているため、筆者は息子・妻・母が寝静まった夜中にメール対応や原稿執筆などを行っていたりするのであるが…）。

図2

日本～ホノルル路線は、比較的、子連れ旅行者が多いこともあり、他の路線よりも多少は気楽であったり、リゾートに出かける方々は心もリゾートにふさわしいゆったりしたりしている方々が多いようにも思われ、筆者としては、周りに十分な気遣いと親としての努力をしている上で、安心して搭乗できる路線と思っていたのであった。

しかし、搭乗時に、周りを押しのけて我先に自分の席にめがけて搭乗していった分別があってしかるべき中年の男性が、ドカッと座席に座り、すかさず、土足で前の席の上部に足を乗せ、子連れで搭乗した斜め後ろの席に座った筆者と筆者の家族をにらみつけてくる方がいらっしゃった。

離陸し、しばらくおとなしく頑張っていてくれた息子が泣いた頃に、親として息子をあやして寝かしつけるために、周りに気遣い、トイレ近くの通路（キャビン・アテンダントさんの作業場であるギャレー近く）に出て周りの方々から離れたところで息子を抱っこしていると、ほどなくして、件の男性から心ないクレームが寄せられた。

「子供を見るのが嫌なので反対側の通路に行け！」と、その男性から筆者側に冷たいクレームが寄せられたのであった。

論理的に反論するならば、「では、私はあなたみたいな人を見るのが嫌なのであなたこそ通路反対側の空いている座席に移動しろ」といっても、相手のやり方・思考回路に沿って対応したならば、成立する反論であったかもしれない。

また、もし、「子供が泣いたら迷惑なことくらいわかっていて当然だろ！」というお話しであれば、その男性のしていた「土足のまま前の席に足を乗せる」と「迷惑なことくらいわかっていて当然だろ！」という常識論らしき反論合戦も筆者が正当性をもって成立しそうである。

あるいは、もしも、この「～を見るのが嫌なので反対側の通路に行け！」という構図の中に、「"黒人"（黒色人種）を見るのが嫌なので反対側の通路に行け！」とか、白色人種の方々から、我々の「"イエロー"野郎（黄色人種）を見るのが嫌なので反対側の通路に行け！」ということになれば、人権問題＋人種差別で大問題であることは、良識ある読者諸氏にとっては想像にたやすいことであろう。

図3

筆者は別に、「欧米では子連れに配慮する素晴らしい社会的風土がある、ビバ！欧米！」というような、欧米式の社会風土を礼賛・妄信しているのではない。実際に国連で仕事をし、アメリカにも住んでいて、それぞれの社会の良し悪しを肌で感じてきている中で、「日本の社会は子供にどう対するか」という問いを社会的に発する必要があるかと思っているのである。

結局のところは、筆者は人権を持つ子供に対し人権を侵害し人種差別さえ許容しかねないような問題あるクレームに対し、「否」という思いを心の内で曲げることなく強く持ちつつも、「外柔内剛」というか、大人としての対応というか、問題あるクレームを出してきた者にとっても相手の身になれば何か嫌なことがあったのかもしれないと慮り、妻に息子をだっこしてもらい反対側に移動してもらい、筆者は頭を垂れてお詫びしつつ日本社会の持つ少子化への社会的圧力を感じざるを得なかったのであった。

ちなみに、その男性の機内持ち込み荷物は、規定の手荷物サイズと個数を上回る規程違反を犯しているのは、搭乗時にも明らかに見受けられたことであった。免税品を買って荷物が重くなった・増えたというわけでもなく、はじめから、荷物をチェックイン・カウンターで預けるべきものを、無理やり機内に持ち込んでいるようであったが、「見るからに」というと申し訳ない感というかレッテルを筆者が貼っていないかと自省すべきかもしれないが、見るからに周りを威圧し自分勝手に振る舞って、周りを押しのけて身障者用の優先座席にドカッと陣取っている様子から、余計なもめ事を避けるために、空港スタッフや機内スタッフがいちいち問題の数々に触れずにスルーしたのだろうなぁと筆者は邪推してみた次第であった。

図4

4. 日本社会は都合よい子供を増やしたいだけなのか？

賢明なる読者諸氏において、社会保障制度の維持においても、日本の国力強化や高齢化社会を健全に支える上でも、少子化対策が急務であり、以前よりもはるかに重要性を増しているのは、改めて議論する必要もないことであろうと筆者は思う。

改正育児介護休業法や社会保障制度関連の改革や、主に厚労省などの少子化をメインにした形でのワークライフバランスと作られたアイドルのような「育メン」ブームなど、それぞれの各側面・各状況等の良し悪しは別として、いずれにせよ、超高齢化社会では、かつて、「長老」として長生きする知恵者が尊敬・尊重された、短命な人生を送る者が多かった社会と異なり、今や、子供が高齢者以上に尊敬・尊重されるべき社会となっていることを物語っているように筆者には思えたりする。

かつて、ある政治家が女性は子供を産む道具であるとの旨の発言をして社会的問題になったことがあったと筆者は記憶している（記憶違いであれば申し

訳ないが、むしろ、何としてでも記憶違いであってほしいとさえ筆者は思う)。

日本社会における少子化対策において、子供が人口として増えれば良くて、航空機の機内では子供は画一的な「お利口さんロボット」のように押し黙って整然と搭乗し、日本の社会の風土としても、子供連れで家族が日本社会で生活し旅行し楽しみ生きていく際に、子供は人口として増えるべきであるものの、子供を育てやすい環境として社会風土自体の変革は許容せず、子供は高齢化の課題解決の道具として存在しろとすら感じさえられかねないような社会的圧力に子連れの家族がさらされ続けることが、日本社会の健全な少子高齢化対策として、また、社会的土壌として促進されるべきことなのであろうかと筆者は危惧し憂慮しているのである。

都合良く子供を産めよ増やせよという割に、その際に都合の悪くなりそうな点に関しては、子供を産んで増やした家族の責任として片務的に負担やサンドバックのように周りからのクレームを受け入れよ、というような社会的土壌であったとしたならば、どれだけの家族が子供を産み育て、その過程も楽しみ苦しみながら素晴らしい人生を送ろうと思えるであろうか。

図5

筆者がベビーカーを押して歩道を歩いていた際、前からスマートフォンをいじりながら下を向いてスタスタと健脚な感じで歩いてきたいわゆるガラの悪いご老人が筆者の方にぶつかりそうになって寄ってきたので筆者がよけると、それにごく近くまで近づいて初めて気づいたそのご老人が、「歩道でベビーカーを押して歩いてくるんじゃねえ、バカヤロー！ぶつかるじゃねえか！」と怒鳴ってきてツバをはいて去って行かれたことがあった。

もしかしたら、そのご老人が何らかの知的障害や精神病を患っているかもしれないし、ご家族の中で危篤に陥っている方からメールが来ていたような、非常にデリケートな状況下に置かれていた方で、筆者にそのストレスなどのはけ口を求めて暴言を吐き捨てて歩いて行ったのかもしれない（と思うようにしてみた）わけで、筆者はつまらない反論やプライドなどは捨てて、我が子に何らかの危害が及ばぬよう、また、筆者自身がもしかしたら何か至らぬ点があったかもしれない（と思うようにしてみた）ので、「大変申し訳ございませんでした。どうぞお気をつけて」と頭を垂れて一声添えていたりしたのであった。

グローバリゼーションを進める企業は、グローバル化に伴うリターンの代わりにリスクや課題とその健全な対処を求められ、企業自体も自己変革していくことなくして健全なグローバル化が進められない。

同様に、日本社会が少子化対策を進めるにあたり、日本社会、そして、その日本社会を構成するわれわれ老若男女が、それぞれに良き社会を健全な絆をもって築きあっていくために自己変革していくことが不可欠なのであると筆者は思っている。

そういった社会として必要な取り組みについて、社会を構成する人々の心を耕し（カルティベートし）、身を削ってでも木鐸の役割を果たすべきなのだろうと筆者は思いながら本連載をしたためてみる次第である。

以上につき、今回は日本社会における少子化の問題とそれを取り巻く社会風土について触れてみた。以降も、「社会を耕す」上で、筆者がお伝えしておきたいことをまとめていこうと思う。

また、本稿を契機として、筆者の見識不足であれどうあれ、CSVに関する議論やその他各種課題についての議論活性化の呼び水となるようであれば、筆者としては幸いである。

平成26年3月10日発行　隔月10日発行　通巻282号　発行：日本工業出版　http://www.nikko-pb.co.jp/

メーカー・卸・小売を結ぶ流通情報総合誌

流通ネットワーキング

3・4
2014
MAR・APR
NO.282

特集

①リテールテック JAPAN 2014を活用する
②物流現場における女性たち

タブレットの業務活用は「閲覧」から「入力」へ

タブレットに手書き入力できる

TabletForm タブレットフォーム

ポイント

- 手書き文字を活字変換
- すぐに利用できる（インストール不要）
- Microsoft® Excel® で入力フォームが作れる

利用シーン		
	●会員申込受付	●店舗売上報告
	●アンケート	●スタッフ勤務報告
	●仕入発注	●商品在庫報告

HAMMOCK 株式会社 ハンモック　http://www.hammock.jp

東京本社	〒171-0033	東京都豊島区高田3-19-10 ヒューリック高田馬場ビル1-2F	03-5957-3630(代表)
名古屋営業所	〒460-0008	愛知県名古屋市中区栄2-9-5 東海ビル5F	052-209-7877
大阪営業所	〒550-0002	大阪府大阪市西区江戸堀1-3-3 肥後橋レックスビル5F	06-6446-2230
福岡営業所	〒812-0013	福岡県福岡市博多区博多駅東2-5-19 サンライフ第3ビル6F	092-433-2020

n_sales@hammock.co.jp

TabletFormについて詳しく知りたい方は

TabletForm 検索